

名古屋帯に関する考察

本間小枝子

I 緒言

婦人用の帯は和装の要^{かなめ}とも言われるように、和装美の上で重要な役割を果している。帯の種類も多く、目的、場所などにより使い分けされている。帯の一種で軽快な日常用として改良された名古屋帯は、今日では、略礼装まで非常に広範囲に用いられるようになった。

名古屋帯の着用法は胴に二巻きして、後ろで結びお太鼓にまとめるが、着用者の胴回りの大小によって帯の過不足が生じる。不足の場合は使用が不便になるので、女子青年層にとって、既製の名古屋帯の長さが適切なものかどうか、また、着用者の身体寸法と帯の長さとの関係はどうであるかを調べるために、本調査をおこない若干の考察を試みた。また、本調査は、被服構成実習の教育の場面で、独りで和服を着ることができないくらい、和服になじんでいない今日の学生に、名古屋帯の構造と各部の仕立て寸法との関係を理解させやすくするためにもこの調査を活かしたいと考える。

II 調査の方法・調査の概要

女子学生25名の身体寸法を計測し、その被検者に肌着、長じゅばん、長着、帯の順に着装させ

- ① 着装の各段階で胴回り寸法がどのように増加するかを調べた。
- ② その結果、帯の胴回り寸法は身体の胴囲寸法にどの位、加えたものが適当であるか。
- ③ また、既製の名古屋帯との関係などを考察した。

1) 調査時期 昭和58年10月および59年10月の2回にわたっておこなった。

2) 被検者 19才と20才の女子学生25名

3) 着装試料および着装順位 一般に着用されている、ふだん着としてのウールひとえ長着と外出用の絹あわせ長着の2点を用いた。

長じゅばん、ならびにひとえ・あわせ長着の寸法は第1表のようである。

着装順位は第2表、第1図のようである。

4) 着装方法

- ① 裾よけ、肌じゅばんの順につけ、伊達締めをする。(第1図A)

第1表 試料のでき上り寸法

種類 名称		大 裁 ち	
		長じゅばん	
袖	丈	51 cm	
袖	つけ	20	
袖	幅	31.5	
身	丈	125.5	
ゆ	き	62.5	
身	八 口	14	
後	幅	30.5	
前	幅	25	
肩	幅	31	
衿幅	上	5	
	下	7.5	
衿	下	68	
裾	ふ き	0.3	

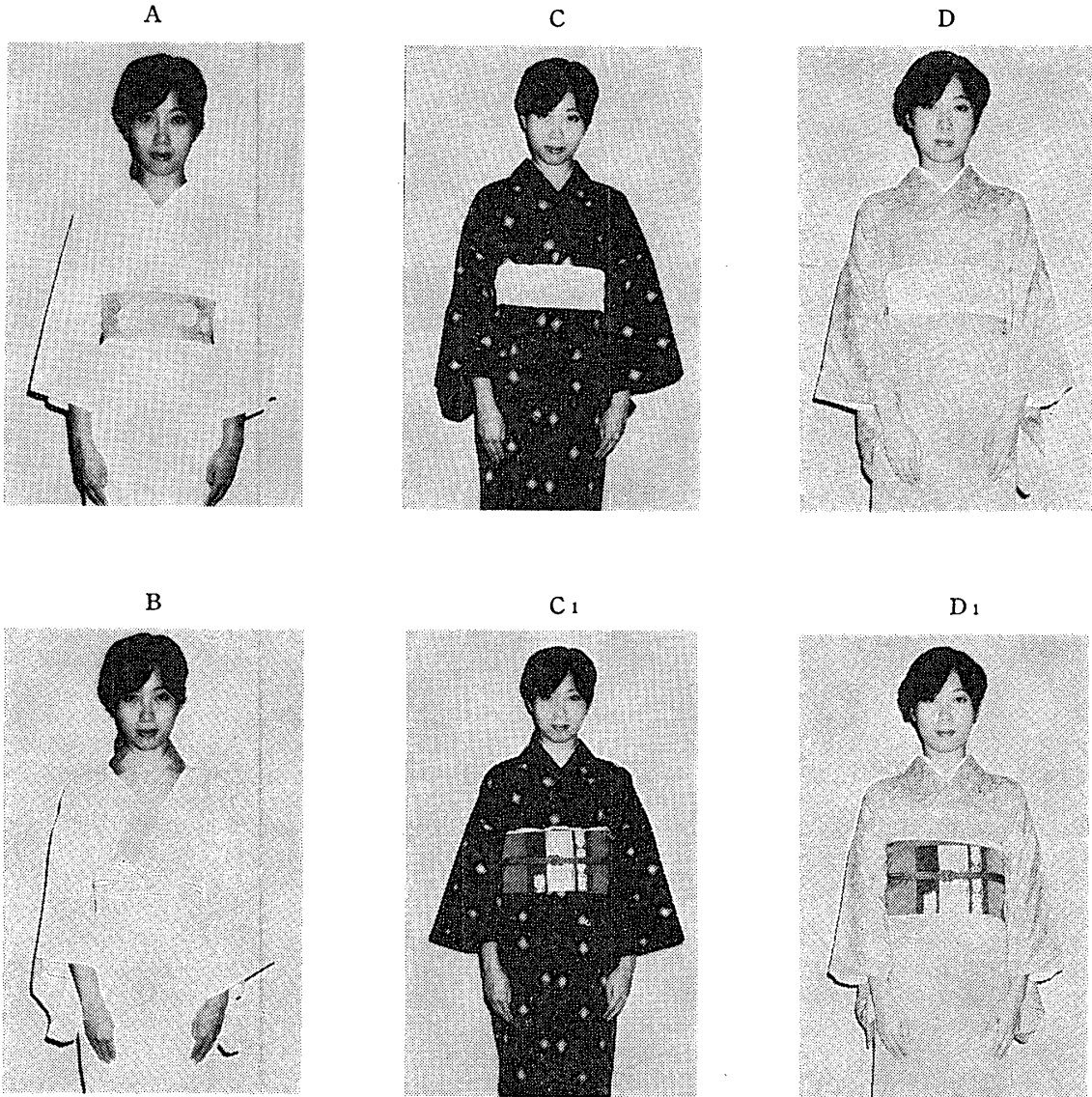
種類 名称		大 裁 ち	
		ひとえ(ウール)	あ わ せ(絹)
袖	丈	47 cm	53 cm
袖	口	23	22
袖	つけ	22	20
袖	幅	32.5	32.5
身	丈	160	155
ゆ	き	65	64.5
肩	幅	32.5	32
衿	肩 あき	8.5	8.5
身	八 口	13.5	13.5
後	幅	28	28
前	幅	23	23
お	くみ 幅	15	15
合	いづま 幅	13.5	13.5
お	くみ 下がり	23	23
衿	下	76	78
広	衿	11	11

第2表 着装順位と素材・機能・要領

順位	試 料	素 材 ・ 機 能 ・ 着 装 要 領
①	パ ン テ イ	綿100% 35g
②	ブ ラ ジャ ー	ナイロン100% 51g
③	裾 よ け	ポリエステル 172g
④	肌 じゅ ばん	綿100% 122g
⑤	伊達締(新装)(1)	マジック式 幅11 丈113 90g 第1図A
⑥	長 じゅ ばん	絹100% (ひとえ) 445g
⑦	伊達締(新装)(2)	ポリエステル (伸縮自由) 83g 第1図B
⑧	着物 {ひとえ あわせ	ウール100% 742g 絹100% 840g
⑨	腰 ひ も	着丈を決め, 腹部に締める。ウール100% 長さ205又は伸縮性のあるベルトを締める。
⑩	伊達締(新装)(3)	⑦と同じで、伊達締とひもの役目を合せたもので、両衿をとめるとめ金具が付いている。おはしよりをととのえ, ウエストに金具でとめ, 衿元をきれいに合わせ伊達締をする。 第1図C. D
⑪	帯	絹100% 650g 名古屋帯・お太鼓
⑫	帯 締 め	絹100% 41g
⑬	帯 揚 げ	絹100% 42g 第1図C ₁ D ₁

「前もつて足袋をはいてから着装を始める」

第1図 着 装 と 計 測



② 長じゅばんをはおり，衿は首からこぶし一つ抜き肌じゅばんの衿と合うようにし，裾を合わせ伊達締めをする。(第1図B)

③ 長着をはおり，着丈をきめ腰ひもをする。裾の上がり加減は毎回そろえる。

おはしりを前後ともとのえて，下前のウエストで伊達締めの金具をとめ，衿を合わせて上前もとめ，衿元を合わせて伊達締めをする。(第1図C，D)

④ 帯板を前にあて名古屋帯をしめ，お太鼓を作り，帯締めをしめる。帯揚げの始末をする。(第1図，C₁・D₁)

5) 胴回りの計測方法

身体寸法はスリップの上から，着装の段階では第1図のように伊達締めおよび帯を締めた状態の上から毎回巻尺を用いて測定する。

Ⅲ 結果と考察

1) 被検者の身体計測値

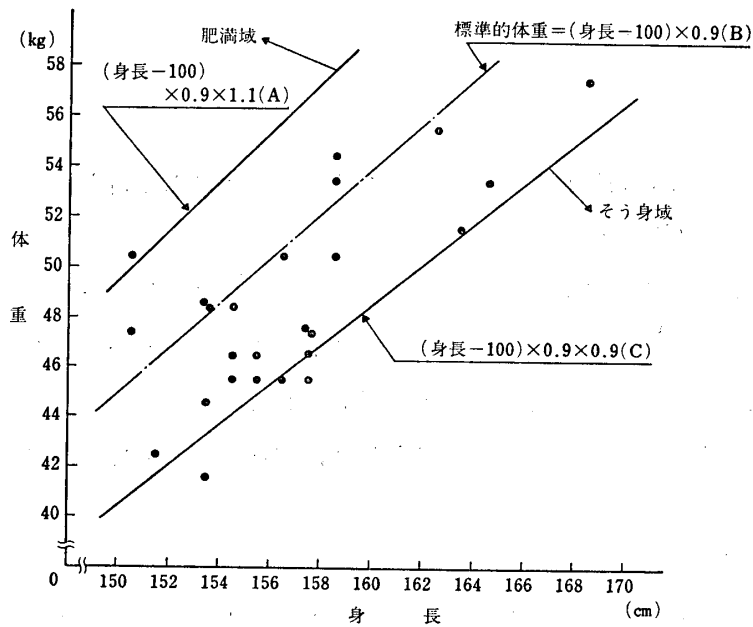
被検者25名の身体計測値をまとめると第3表のようである。

第3表 身体計測値

部 位	平均値	標準偏差
バスト (B)	81.4	2.7
アンダーバスト (UB)	72.3	3.2
ウエスト (W)	61.4	3.1
ミドルヒップ (MH)	81.0	5.1
ヒップ (H)	86.7	3.4
身長	156.3	4.3
着丈	133.6	4.8
ゆき	62.6	3.2
体重	48.1	3.9

これを文部省「体力運動能力調査報告書」(昭和59年)の女子19才と比較すると、本調査の方が身長において約1.5cm低く、胸囲は0.9cm少なく、体重は2.8kg少ないが、いずれも統計的にみて有意の差ではなかった。

第2図 身長と体重との関係



① 身長と体重との関係

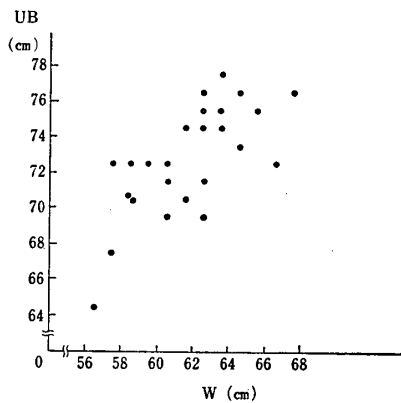
被検者の身長と体重との関係は第2図のとおりである。

さらに、一般に用いられる標準体重との判定式に当てはめると、第2図のとおりで、ほとんど標準体重域に属し、身長150cm台の1人が肥満域に、153cm、156cm、157cmに1人ずつそう身域に属する者がいる程度であった。

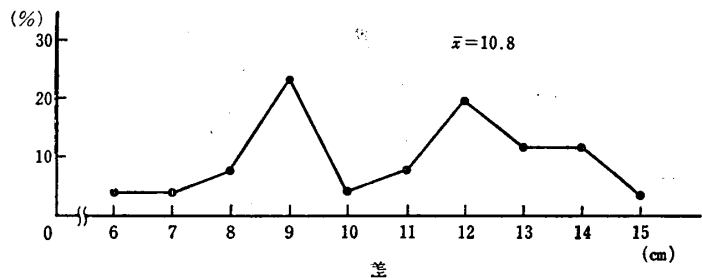
② ウエスト(w)とアンダーバスト(UB)との関係

ウエストとアンダーバストとの関係は第3図、第4図のようである。

第3図 WとUBとの関係



第4図 WとUBとの差



ウエストが大きくなるにしたがって、アンダーバストも大きくなる傾向があり、そのバラツキも大きい。

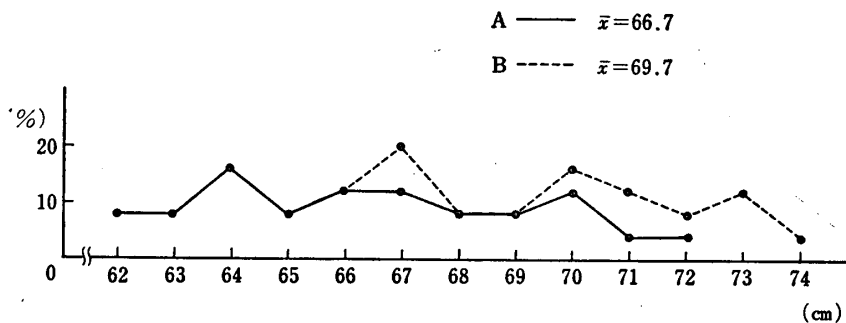
ウエストとアンダーバストとの差は、第4図のようであり、両者の差の度数分布は9cmと12cmの二つの山になっている。平均は10.8cmである。

2) 着装時の胸回り計測の結果

肌じゅばん着状態(A)、長じゅばん着状態(B)、Bの上にウール長着着状態(C)、Bの上に絹あわせ長じゅばん着状態(D)、Cの上に名古屋帯を締めた状態(C₁)、Dに名古屋帯を締めた状態(D₁)以上6種類の胸回りの計測をおこなった結果は以下のようである。

① 肌じゅばん着状態(A)と長じゅばん着状態(B)

第5図 AとBの分布



肌じゅばん着装(A)と長じゅばん着装(B)における胴回りの分布は第5図のとおりである。

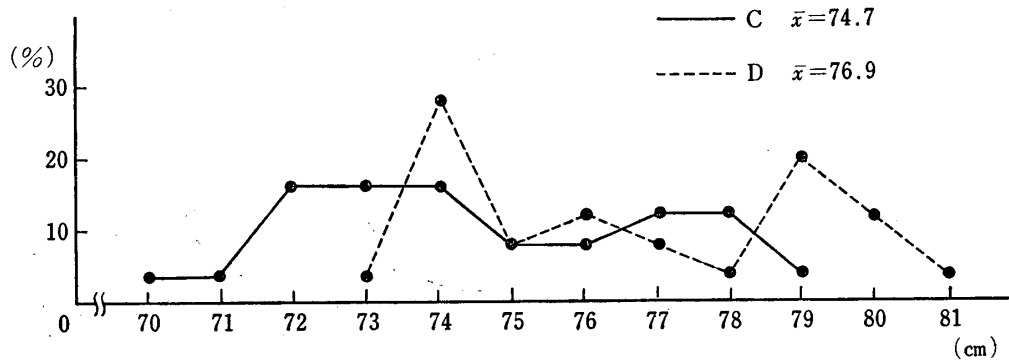
Aの場合の分布は62cmから72cmで64cmが16%と最も多く、ついで66cm, 67cm, 70cmの順と少なくなっている。

Bの場合の分布は66cmから74cmで67cmが20%と最も多く、AとBの差は平均3cmである。

② ウール長着着装(C)と絹あわせ長着着装(D)

ウール長着着装(C)と絹あわせ長着着装(D)における胴回りの分布は第6図のとおりである。

第6図 CとDの分布

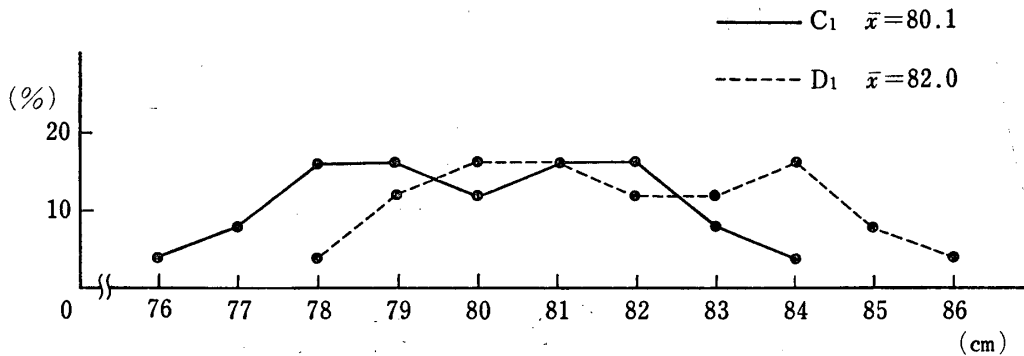


Cの場合の分布は70cmから79cm, Dの場合の分布は73cmから81cmであって、一般に絹あわせ長着着装の方が胴回りが大になることがわかった。Cの胴回り平均は74.7cm, Dの胴回り平均は76.9cmで、その差はDの方が2.2cm多く、これは、被服の素材、おはしょりの分量および整え方、ひとえとあわせの差などの諸要素が関係して胴回りに影響してくる。

③ ウール長着着装(C)に名古屋帯を締めた状態(C₁)と絹あわせ長着着装(D)に名古屋帯を締めた状態(D₁)

ウール長着着装(C)に名古屋帯を締めた状態(C₁)と絹あわせ長着着装(D)に名古屋帯を締めた状態(D₁)における胴回りの分布は第7図のとおりである。

第7図 C₁とD₁の分布



C₁の場合の分布は76cmから84cmで、78cm, 79cm, 81cm, 82cmがそれぞれ16%で最も多く、ついで80cm, 77cm, 83cm, 76cm, 84cmの順となっている。

D₁の場合の分布は78cmから86cmにおよび、80cm, 81cm, 84cmが16%と最も多く、ついで79cm, 82cm, 83cm, 85cm, 78cm, 86cmの順に少なくなっている。

C₁とD₁の度数分布は同じ傾向を示し、C₁の胴回り平均は80.1cm, D₁の胴回り平均は82.0cmでその差はD₁の方が1.9cm多い。

④ 各着装間の胴回りの差

各着装間の胴回りの差は第8図①から⑤までのようである。

① ウエスト(W)と肌じゅばん(A)を着装した胴回りとの差は3cmから7cmの範囲で、4cm, 5cmが32%と最も多く、平均は5.3cmである。みぞ落ちのくぼみの補正が差の大きな原因である。

② 肌じゅばん(A)と長じゅばん(B)を着装した胴回りとの差は2cmから7cmで、3cmが60%と最も多く、その平均は3cmであり、長じゅばんと伊達締めの方が増加している。

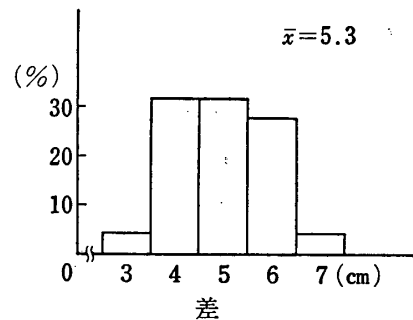
③ 長じゅばん(B)とウール長着(C)を着装した胴回りとの差は4cmから7cmの範囲で、4cmが44%と最も多く、その平均は5.1cmであり、その増加の理由は、ウール地のおはしより分と伊達締めである。

④ 長じゅばん(B)と絹あわせ長着(D)を着装した胴回りとの差は6cmから10cmで、6cmが44%と最も多く、その平均は7.2cmである。増加の要因は同一の長着を身長異なる被検者に着用させたために、おはしよりの分量に多少の差があったために、増加分に大分差がつくものと考えられる。

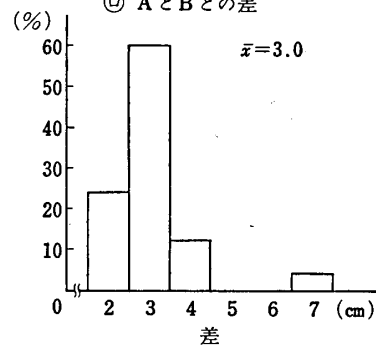
⑤ ウール長着(C)とCの上に名古屋帯

第8図 各着装間の胴回りの差

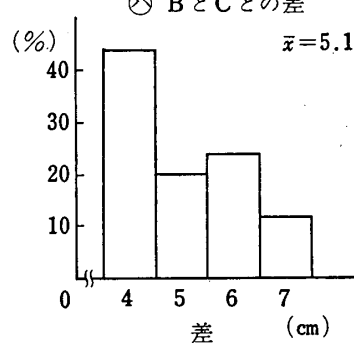
① WとAとの差



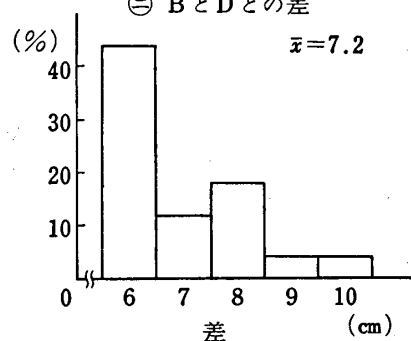
② AとBとの差



③ BとCとの差



④ BとDとの差



を締めた状態(C₁)の胴回りとの差は2cmから7cmで、6cmが40%と最も多く、その平均は5.4cmである。

㉔ 絹あわせ長着着装(D)とDの上に名古屋帯を締めた状態(D₁)の胴回りとの差は3cmから7cmの範囲で、4cmが36%と最も多く、ついで6cmが32%の順となっている。その平均は5.2cmである。帯の締め加減は同一の人が同じ加減に締めたので長着の着装がきちんと整っていれば、帯を2回胴に巻いた分量が増加量の要因である。

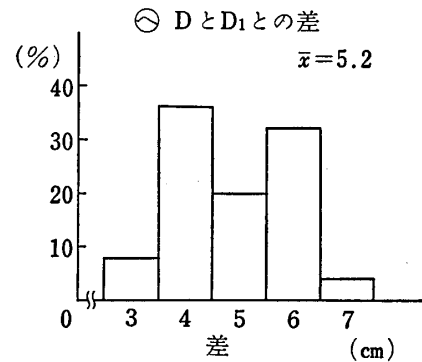
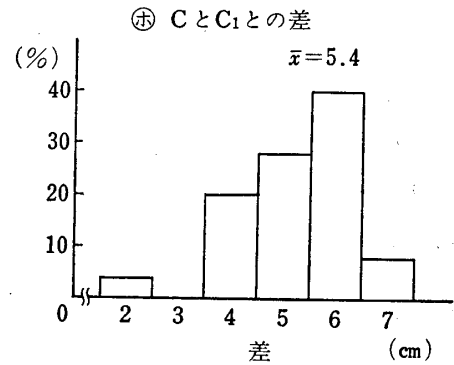
⑤ ウエスト(W)と長着着装時の胴回りとの差

以上の結果から、ウエストと各長着着装時の胴回りとの差は第9図①から⑤までのとおりである。

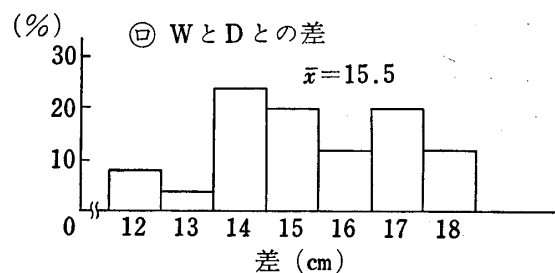
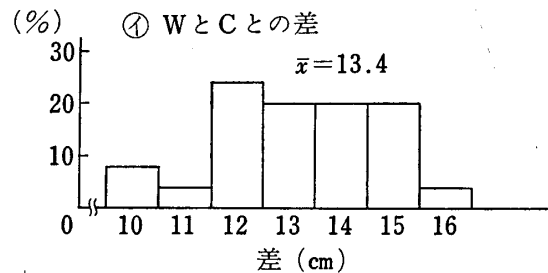
① ウエストとウール長着着装時(C)との差は、10cmから16cmで、その平均は13.4cmである。被検者のウエストの平均値61.4cmの21.8%にあたる。したがって、ウール長着着装の場合の帯の胴回り寸法は、各人のウエストに約14cmを加えるか、ウエストの約22%を加えた寸法である。

② ウエストと絹あわせ長着着装時(D)の胴回りとの差は12cmから18cmで、14cmが24%と最も多く、その平均は15.5cmで、ウエストの25.2%にあたる。したがって、絹あわせ長着着装の場合の帯の胴回り寸法は各人のウエストに、約16cmを加えるか、ウエストの約25%増として求める。

③ ウエストとウール長着に名古屋帯を締めた状態(C₁)の胴回りとの差は、16cmから21



第9図 Wと長着着装時の胴回りとの差



cmで、18cmが32%と最も多く、ついで19cmの28%の順で、その平均は18.7cmで、ウエストの約31%にあたる。したがって、ウール長着装着に名古屋帯を締めた場合の胴回りは、各人のウエストに約20cmを加えるか、ウエストの約31%を加えたものである。

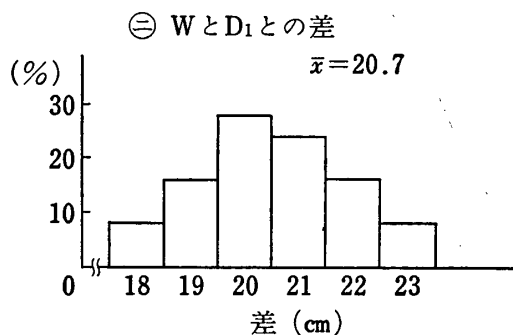
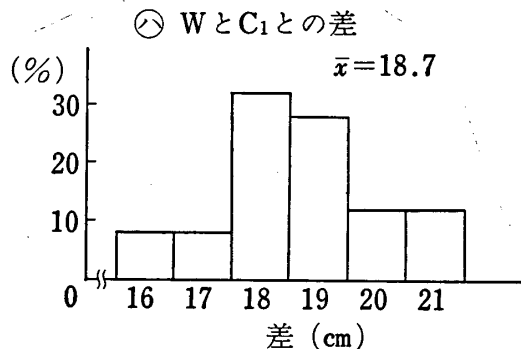
㊦ ウエストと絹あわせ長着に名古屋帯を締めた状態(D₁)の胴回りとの差は、18cmから23cmで、20cmの28%が最も多く、ついで21cmの24%の順で、その平均は20.7cmであり、ウエストの33.7%にあたる。したがって、絹あわせ長着に帯を締めた場合の胴回りは、各人のウエストに約21cmを加えるか、ウエストの約35%を加えたものである。

㊧ アンダーバスト (UB) と長着装着時の胴回りとの差

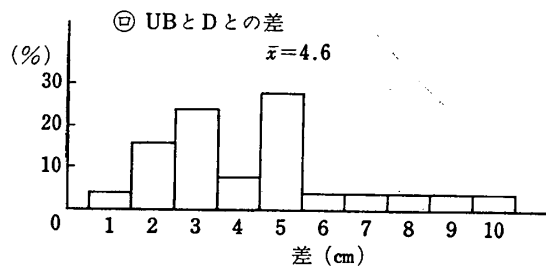
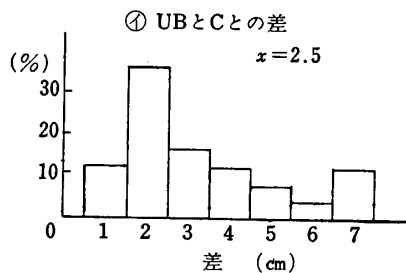
アンダーバストと各長着装着時の胴回りとの差は第10図㊨から㊩までのとおりである。

㊨ アンダーバストとウール長着装着(C)との差は1から7cmで2cmが36%と最も多く、ついで3cmが16%の順で、その平均は2.5cmで、被検者のアンダーバスト平均値72.3の3.5%にあたる。したがって、ウール長着装着の場合の帯の胴回りはアンダーバストに約3cmを加えるか、アンダーバストの約4%増と考えることができる。

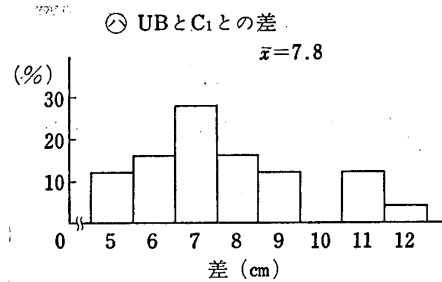
㊩ アンダーバストと絹あわせ長着装着(D)との差は1cmから10cmで、5cmが28%と最も多く、ついで3cmが24%の順で、その平均は4.6cmであり、アンダーバストの約6%にあたる。したがって、絹あわせ長着装着の場合の胴回りは、アンダーバストに約5cmを加えるか、アンダーバストの約6%増として求める。



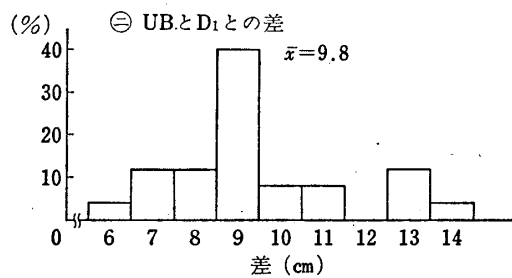
第10図 UBと長着装着時の胴回りとの差



㊦ アンダーバストとウール長着に名古屋帯をしめた状態(C₁)の胸回りとの差は、5 cmから12cmで、7 cmが28%と最も多く、その平均は7.8cmであり、アンダーバストの10.8%にあたる。したがって、ウール長着に名古屋帯をしめた場合の胸回りは、アンダーバストに約8 cmを加えるか、アンダーバストの約11%増として求める。



㊧ アンダーバストと絹あわせ長着に名古屋帯をしめた状態(D₁)の胸回りとの差は6 cmから14cmで、9 cmが40%と最も多く、その平均は9.8cmであり、アンダーバストの13.6%にあたる。したがって、絹あわせ長着に名古屋帯をしめた場合の胸回りは、アンダーバストに約10cmを加えるか、アンダーバストの約14%として求め加える。



以上の結果からごく大ざっぱではあるが、名古屋帯の基準とする胸回り寸法は、内側はウエストに10~16cmを加え、外側はウエストに16~21cmを加えたものとみることができる。

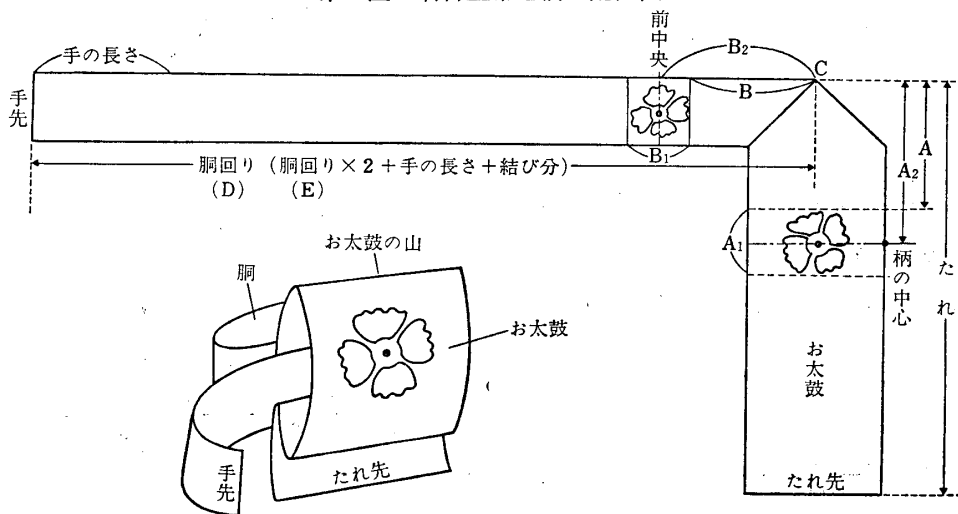
IV 名古屋帯の現状

裁縫書および市販の名古屋帯の実態について検討した。

1) 裁縫書による名古屋帯の各部寸法 (用いた裁縫書は巻末に・印で示す。)

裁縫書による名古屋帯の寸法は第11図および第4表のとおりである。

第11図 名古屋帯と柄の配置図



第4表 裁縫書に見られる名古屋帯の寸法

① たれ		② 胴回り		③ 帯丈(①+②)	
長さ	数	長さ	数	長さ	数
cm		cm		cm	
85	1	200	1	290	1
90	1	210	1	295	1
100	2	215	0	320	2
105	2	220	5	325	2
110	5	225	4	330	3
115	2	230	4	335	3
120	2			340	2
				345	1
合計	15	合計	15	合計	15

名古屋帯の幅はたれの部分が30cm内外、胴回り(D)部分はたれの $\frac{1}{2}$ (15~16cm)とされており、これはどの裁縫書も一致するところである。

帯のたれ、胴回り(D)の寸法については差違がみられ、たれは、85cmから120cmの範囲で110cmのものが最も多い。そのうち30cmが上端の結び目になる分、約10cmがたれ、残りがお太鼓であるから約110cmが普通寸法とされている。

胴回り(D)は、200cmから230cmにおよんでおり、220cmのものが多く、この長さは胴回り(E)を80cmとし、これを2倍して、手の長さ40cmとC部の結び目分15~20cmを加えたものである。

したがって、帯丈はたれと胴回り(D)丈を加えたもので330cm、335cmのものが多かった。

2) 市販による名古屋帯の寸法

市販による名古屋帯の調査は、昭和59年、本学の学生が教材として使用したものの15点とデパート2社、呉服店3店の合計50点についておこなった。

名古屋帯の柄には、お太鼓柄、全通、六通などあるが、柄の位置が問題となるお太鼓柄についておこなった。

市販による名古屋帯の寸法は第5表のとおりである。

帯のたれは105cmから120cmにわたり、110cmのものが最も多く、裁縫書にみる最短のたれ85cmに対し、市販の最短は105cmで20cm長い。

胴回り(D)の丈は240cmから275cmにおよんでおり、240cmのものが最も多い。275cmがあるのは、これは体格のよくなった現代人に対応して長くしたものと考えられる。

裁縫書では230cmが最長であったが、市販の各部寸法についてみると、最短240cmから手の長さと結び目分60cmを減ずれば、残りは180cmで、胴回り(E)は、その $\frac{1}{2}$ で90cmとなる。最長の275cmから手の長さと結び目分60cmを減ずれば215cmで、その $\frac{1}{2}$ は約108cmであり、胴回り(E)が108cmでも十分着用できるように配慮されていることがわかる。

たれ、胴回り(D)丈が長いことは、当然帯丈も長く、帯丈が345cmから390cmにおよんでおり、裁

第5表 市販による名古屋帯の寸法

① たれ			② 胴回り			③ 帯丈 (①+②)		
長さ	実数	割合	長さ	実数	割合	長さ	実数	割合
cm		%	cm		%	cm		%
105	9	18	240	15	30	345	9	18
110	17	34	245	12	24	350	6	12
115	12	24	250	13	26	355	11	22
120	12	24	255	2	4	360	1	2
			260	2	4	365	11	22
			265	4	8	370	2	4
			270	1	2	375	2	4
			275	1	2	380	2	4
						385	4	8
						390	1	4
合計	50	100	合計	50	100	合計	50	100

縫書の最長345cmと市販最短345cmと同一である点から、市販のものは最近長くなっており、これも体位の向上や、和服着用者が中年の肥った人が多いことに対応するものであろう。

3) 名古屋帯と柄の配置

名古屋帯と柄の配置および配置図は第6表と第11図のとおりである。

第6表 名古屋帯の柄の配置

A			A ₁			A ₂			B			B ₁			B ₂		
長さ	実数	割合	長さ	実数	割合	長さ	実数	割合	長さ	実数	割合	長さ	実数	割合	長さ	実数	割合
cm		%	cm		%	cm		%	cm		%	cm		%	cm		%
30	20	40	15	10	20	43	10	20	33	10	20	13	5	10	42	6	12
33	5	10	21	5	10	46	5	10	34	5	10	14	15	30	43	2	4
35	25	50	25	5	10	48	5	10	35	20	40	18	5	10	44	6	12
			38	10	20	49	2	4	36	2	4	20	2	4	45	3	6
			40	15	30	50	13	26	37	2	4	22	7	14	46	8	16
			42	5	10	51	5	10	38	1	2	30	15	30	47	8	16
						52	3	6	39	1	2	38	1	2	48	11	22
						53	2	4	40	8	16				49	5	10
						54	5	10	41	1	2				56	1	2
合計	50	100	合計	50	100	合計	50	100	合計	50	100	合計	50	100	合計	50	100

たれと胴回りの境(第11図C)から柄までの寸法Aは30cmから35cmであり、これは、お太鼓の山を調節するためのゆとりで、帯幅(30cm)以上あるから、折り方を加減してお太鼓の柄を自由に出すことができる。A₁の柄の単位は15cmから42cmまでと広範囲におよんでおり、お太鼓の変化を楽しめるように配置されている。

次に胴回りの前柄の位置は、各人の体格などによって決めればよいのであるが、一般に前柄(B₁)の中心が前中央にくるようになっている。B₂の寸法は胴回り(E)の $\frac{1}{2}$ に、C部の結び分を加

えたものである。

B寸法は33cmから41cmの範囲で35cmのものが40%と最も多く、前柄(B₁)は13cmから38cmにおよんでおり、14cmと30cmの長さのものが多し。BとB₁の関係から、B₂の寸法、すなわちB寸法に前柄(B₁)の長さの $\frac{1}{2}$ を加えたものが最短42cmから最長56cmあるが、胴回り80cm以上の着用者には不足する。本調査では約半数が該当するので、前中央の柄の位置も自由に調節できる長さに配慮されることが必要であろう。

V まとめ

以上の結果をまとめると次のようなことが言える。

1) 着実験により各着装間の胴回り(E)とその差を知ることができ次のようであった。

- ① ウエストと肌じゅばんとの差は約5cmで、肌じゅばんまでの胴回りは約67cmであった。
- ② 肌じゅばんと長じゅばんとの差は約3cmで長じゅばんまでの胴回りは約70cmであった。
- ③ 長じゅばんとウール長着との差は約5cmで、ウール長着までの胴回りは約75cmであった。

長じゅばんと絹あわせ長着との差は約7cmで絹あわせ長着までの胴回りは約77cmであった。

- ④ ウール長着と名古屋帯を締めたところまでの差は約5cmで胴回りは約80cmであった。

絹あわせ長着と名古屋帯を締めたところまでの差は約5cmで胴回りは約82cmであった。

2) 着実験により、体型、肌着、長着の種類、素材、着実状況、(おはしよりの整え方)が胴回り寸法に影響する。

3) 名古屋帯の胴回り(E)は一般に各人のウエストに約20cmを加えればよい。

別法として、ウール長着着用の場合、ウエストの約131%、アンダーバスの約111%とし、絹あわせ長着着用の場合、ウエストの約135%、アンダーバスの約114%とすることも考えられる。

なお、ウールひとえ、絹あわせ長着どちらにもあてはまる寸法としては、ウエストの約135%、アンダーバスの約115%とする。

4) 市販による名古屋帯の現状では、帯丈は胴回り(E)が100cm以上でも着用できるように十分あるが、前柄の位置の配慮も必要である。また、帯丈は短かくても長くても着実しにくいものであるから、上記の条件を考慮して、各人の寸法に適した帯に仕立てることが必要であろう。

引用裁縫書

- 1)・石田はる；和裁 (主婦の友社) 1983
- 2)・石崎忠司；きものの帯 (衣生活研究会) 1979
- 3)・池部、川村、佐野、柴田、田尻、永井；新和服裁縫 (建帛社) 1974, 1985

- 4) ・池田富美；和裁（日東書院）1975.
- 5) ・大塚末子；新しい和裁（同文書院）1983.
- 6) ・織田稔子；新しい和裁（永岡書店）1984.
- 7) ・大妻コタカ；和裁講座前・後編（生活文化社）1979.
- 8) ・久保・加地・小沢・衛藤・森山・桜井；和服の理論と実際（京都書院）1979.
- 9) 佐川澄子；縫う，指導と実際（光生館）1978.
- 10) ・清水とき；きもの全科（家の光協会）1974.
- 11) ・主婦の友社出版部編者；和裁全書（主婦の友社）1981，1983.
- 12) ・滝沢ヒロ子；新しい和裁全書（永岡書店）1983.
- 13) ・同上；あわせ・帯・じゅばん（同上）1981.
- 14) ・土井幸代；和裁（同文書院）1983.
- 15) 東京家政学院和服裁縫研究会著；新和服工作（上・下巻）（光生館）1977，1984.
- 16) ・成田順・石原アイ；和裁の研究（同文書院）1981.
- 17) ・婦人生活出版部編者；和装と和裁（婦人生活社）1975.
- 18) ・吉崎よし；和裁全書（集文館）1975.
- 19) 吉村八重野；図解和裁学習書（家政教育社）1980.
- 20) 西修セツ；記号式和裁（前・後編）（東海学園女子短期大学出版部）1977.